
三人一緒に幻想入り外伝 三人のなれそめ

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人一緒に幻想入り外伝 三人のなれそめ

【Nコード】

N01610

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あらすじ

三人一緒にてお馴染みのあの三人のなれそめを、それとなく短編にて綴った外伝です。暇つぶし程度にどうぞ

（前書き）

前書き

こんばろ（＃＾―＾＃）多分お馴染みの澄田です（＾―＾）
秋の短編祭りと言う事で、ずっとPCで置いた話を開放してみました

（＾―＾）

これはまあ三人一緒に幻想入りの後付け的なものですかね？
まあ暇つぶし程度に見てくださいいな。ではどうぞ。

先「みんな、今日からこの中学に転校して来た、アメリカからの帰国子女、戦動 陸君だ。仲良くしてやれよ。」

俺の隣で、教師がお手本通りの説明をする。

そんな俺もまた、お手本通りに挨拶をする。

陸「みなさん、おはようございます。これからこのクラスの一員になる戦動 陸です。よろしくお願いします。」

挨拶が済めば、男女問わずに教室は騒々しくなる。

先「みんな静かに。それじゃ戦動君は後ろの窓際の方の空いている席に座ってくれ。」

陸「わかりました。」

俺は先生に指示された場所にとりあえず座った。
当然のごとく周りにいる女子から色々と聞かれる。

女1「ねえ、戦動君ってハーフなの？」

女2「アメリカにいた頃ってどうだった？」

女3「頭よさそうだね。それに運動神経とかも。」

女4「それよりマジ格好いい！！このクラスの男子とは大違いだよ。」

こんな感じでちやほやもてはやされるのはもう慣れた。
俺はそれぞれ応答をして、ある程度は適当に流した。

クラスの印象はまあ普通。先生もいたって普通。今の俺の周りには正直馬鹿ばかりいるように思えた。

日本じゃ義務教育が何とかと母が言っていたから中学に通わなければ駄目らしい。

俺はこんな所うんざりだな。アメリカじゃ出来る奴はもっと上に行くルールだつてのに。

授業が始まってわかりきったような内容に俺はただ退屈する。

家庭の事情とかで日本に来ちまったのが不運だな。

初日から俺は自分の中で今の現状を割り切った。

クラスの奴とは適当に相手して、クラブとかも適当にやって、成績はこのレベルならトップ確実。そして俺はそれなりの進路を選んで、それなりの人生を歩む。

そんな未来でも仕方ないだろう。今更そんな上を目指す気力もない。窓際で退屈な授業を受ける。そして俺は平凡になっていく。

一時間目のチャイムが鳴った。どうやら授業は終わっていたようだ。休み時間、今度は男子の連中が俺に絡んできた。

それを女子同様に俺は適当に流していく。

しばらくして、このクラスの学級委員らしい男が俺に挨拶に来た。

正「わしはこのクラスの学級委員の拳武 正や。お前ってほんまにアメリカに住んどったんか？」

陸「ええ。」

正「マジかい！！ええやんアメリカ育ちなんて。わしなんて田舎の貧乏育ちやで。ほんまうらやましいのう。さぞかし育ちがええんとかやうか？」

・・・なんだこいつ？やけに絡んでくるな。まあ学級委員として接してきてるんだろうな。

こいつも適当に流すか。

陸「そうでもないですよ。あなたと同じですよ。」

正「嘘つけやあ！！そんな訳絶対あらへんて！謙遜せんでもええでえ？」

陸「だから俺は・・・」

？「正、誰と喋ってるの？」

な、こいつ・・・俺が言おうとしている時に割り込んできやがった・

正「なんや進か。わしは今日新しく来た転校生としゃべったんや。」

進「転校生？あ！もしかして噂の帰国子女？何か格好いいな。」

ち、また面倒そうなのが出てきたな。

正「氣い悪くせんとしてくれや。こいつはわしの幼馴染の鳥間 進や。隣のクラスやで。」

進「よろしく。そっぴや名前は？」

陸「戦動 陸です。」

進「戦動 陸？へえ、ちゃんと覚えておくね！」

正「そう言つて忘れるやろ？お前の場合。」

進「大丈夫だよ。後でメモっておくから。」

・
メモる？それぐらいしないと覚えられないのか？ふざけやがって・

正「おっと、もう時間やのう。そんじゃまた後でのう進。」

進「うん。昼休みにまたね！」

やっと帰ったか・・・にしても目障りな奴だったな・・・

正「・・・なんやえらい機嫌悪そうやのう。気に障ったか？」

陸「え？いえ、そんな事はありませんよ。」

正「そか。そやったら昼飯わしとあいつと一緒に食わへんか？先客もおらんっぽいし。」

はあ？こいつ真剣に言ってるのか？そんなの冗談じゃない。

陸「いえ、そんな気をつかわなくてもいいですよ。」

正「おい、転校生やからって遠慮すんなや。そんじゃ後でのう。」

ど・・・どうしてこうなったんだ・・・本当にこいつらと昼飯を食う事になるとはな・・・

仕方ない、出来るだけ適当に相手するしかない。

正「お、戦動の弁当うまそうやのう。それ一つくれや。」

進「ちょっと正、いくら何でもずうずうしいよ。」

正「ははは、それもそうやの・・・ってわしのウイナーが一つない！！なんでや！？」

進「油断大敵だよ。」

正「お前かこらあ！！返せやあ！！」

・・・こいつら、飯の時間だったのに落ち着きなさすぎだろ？どういう神経してるんだ？

まあいい。下手に俺に絡まれたらたまらんからな。

進「あ、そうだ。食べ終わったら戦動君サッカーしない？」

サッカーだと？まあ転校した初日だ。サッカーぐらいならいいか。

陸「別にいいですよ。」

正「そか。その時になったら、帰国子女の腕見せてもらうで！！」

正「おっしゃー！全員集まったか！？今日は期待のエースがおるから、こっちは負けへんで！！」

味方一同「おーっ！！」

陸「期待のエースって・・・もしかして俺の事ですか？」

進「もちろん。戦動君は僕らのチームだから頑張ってね。」

陸「・・・はい。」

進「・・・何かさ、戦動君って変にかしこまってるよね。優等生タイプ？」

陸「想像にお任せしますよ。」

進「あつそ。あ、こっちにボール飛んできた。戦動君とつて。」

陸「わかりました。」

正「お、ようとしたで戦動！！そのままドリブルで行け！！」

敵生徒1「おい！！帰国子女だからってでかい顔させねえぞ！！おらあ！！」

進「危ないよ、戦動君！！」

危ない？こんな丸わかりのスライディングで俺が危ないだと？

ここは頭だけじゃなくてスポーツのレベルもこんなものか。
この程度なら軽く抜けられるな。

敵生徒1「何い！？この俺様が抜けられるとは！？」

正「さすがや戦動！！帰国子女は伊達やないのう！！」

帰国子女関係ないだろ。

さて、抜けたはいいが、少し囲まれてるし、このままドリブルするのはかつたるいな。適当に誰かに渡すか。

正「こつちや戦動！！」

・・・まあこいつでいいか。

正「ナイスパス！！こつからは任せえ！！」

お、ボール持たしたら、結構なスピードで走っていったな。

進「すごいよ戦動君！！運動もばっちり出来るんだね！！」

陸「アメリカにいた頃から、このような事は一通り出来ましたので。」

進「へえ、なんだか格好いいね。正とは大違いだよ。正は運動しか出来ないからね。でもそのスポーツだったら多分学校一だね。」

陸「なるほど。一芸に秀でている訳ですか。」

進「そんな格好のいいもんじゃないだろうけどね。」

正「おっしゃあ！！今回はわしのチームの勝ちやで！！」

敵生徒1「ちつくしよお！！覚えてろ転校生！！」

正「くやしかったらもつとうまくなつた方がええで。」

陸「・・・どうやら終わったようですね。」

正「ああ、今回は戦動の活躍のお陰で勝てたで。期待してた通りでよかったよかった。」

陸「そんな、俺はそんなに活躍してませんよ。」

正「また謙遜かい。もっと素直になったらどうや戦動？」

陸「・・・俺はこういう性格ですので、それでは。」

正「おい待てや・・・ってもう行ってもうた。何や無愛想な奴やのう。」

進「ずっと自分を隠してるよね。」

正「お？進にはわかってるんか？」

進「まあね。今の所優等生っぽいキャラだけど、本当は違うね。」

正「そか。何にせよ仲良くするには時間かかりそうやのう。」

進「そうかもね・・・ってもう授業始まるよ！！急がなきゃ！！」

正「マジで！？それはやばいのっ！！」

先「では、今日のホームルームを終わります。みなさんさようなら。」

やっと終わったか。

初日からこの学校の底は見えたな。

さて、絡まれない内にさっさと帰・・・

正「おい戦動！！お前確か帰り道わしと同じやなかったか？せつかくやから一緒に帰ろうや！！！」

・・・またこいつか。

正「聞こえてんか戦動！？！」

陸「聞こえてますよ、拳武さん。」

正「それやったら、すぐに返事してくれや。」

陸「すみません。」

正「別に謝らんでええねん。で、一緒に帰らへんか？」

参ったな・・・こいつの大声でクラスの奴が結構見てやがる。

ここで断つたら後が面倒だな。仕方ない。

陸「俺は別に構いませんよ。」

正「そか。そんじゃ進も呼んでくるで。」

陸「え？鳥間さんも？」

正「そうやで。別にええやろ？」

あ、あいつまで一緒かよ・・・くっ、ここは我慢するしかないな・・・

進「正、今日は戦動君もいるの？」

正「そうやで。」

進「じゃあ、帰り道でいっぱいお話しようか！」

まったく・・・初日から面倒なのに目を付けられたな・・・

進「でさ、戦動君って何で転校してきたの？」

陸「家の事情ですよ。」

進「そうなんだ。結構複雑な事情っぽいね。」

正「ええやんけそういの。漫画でしかない展開みたいで面白そうや。」

進「ちよつと正、他人事だと思ってない？」

正「あ、すまん。気に障ったなら謝るで。」

陸「・・・別に構いませんよ。あ、俺の家こっちの方なので失礼します。」

正「あ、ちよいまで戦動・・・ってまた逃してもうた。」

進「・・・正の言ったこと、気にしてたんじゃないの？」

正「・・・悪い事したかのう。後で謝つとかなあかのう。」

陸「ただいま、母さん。」

陸母「おかえりなさい陸。新しい学校はどう？」

陸「別に。どこでも大差ないよ。日本の学校なんて。」

陸母「それでも、勉強はちゃんとしておきなさいね。高校はもっと

レベルの高い所に行くのよ?」

陸「わかってるよ。」

陸母「あ、父さんが帰ってきたら話があるって言ってたわ。」

陸「え?もう帰ってたの?」

陸母「ええ。今日は少し仕事が早かったみたい。」

陸「そう・・・」

陸母「片付けてからでいいから、父さんの部屋にいきなさいね。」

陸「はい。」

どうせどうでもいい事だろうけど、顔は出しておくか。

陸「入るよ父さん。」

陸父「Sure・Welcome」.

約「やあ、来たか」

陸「で、話って何?学校とかならいつも通りだよ?」

陸父「No,I have a question to ask
you・Do you made a new friend
s in japanese school?」

訳「いや、それより聞きたい事が一つあるんだ。お前は今の学校で新しい友達は作ったか？」

陸「友達なんて・・・俺にはいらぬ。友達なんて重荷にしかたない。」

陸父「Understand me, It is important for you to make a true friends。」

訳「よく聞きなさい。お前は心の友達を作るべきなんだ。」

陸「心の・・・友達？」

陸父「Riku, You will find that I am meaning a eustion。」

訳「陸、お前なら、私の言いたい事がわかって信じたい。」

陸「・・・わかりたくない、そんな事！」

陸母「・・・あの子、飛び出しちゃったわね。あんな調子じゃ無理じゃないかしら？」

陸父「No problem, I am sure that he will succeed。」

訳「大丈夫だ。私はあいつを信じている。」

陸母「それならいいんだけど。」

なんだよ・・・今になつてあんな事言いやがつて・・・自分の都合で俺を振り回しておきながら・・・勝手すぎるだろ・・・今更友達なんて・・・なんだ？あいつらの顔が浮かんできた・・・くそっ！なんだつて言うんだ！あんな奴らただ目障りなだけだろ！ただ目障りなだけ・・・なはずなのに、なんでこんなにあいつらの事を思っているんだ？父さんがあんな事言つたからか？じゃあ俺は・・・あいつ等の事を気づかない内に友達だと思つたのか？そんな事あつてたまるか！俺はこれから先も・・・友達なんて・・・

正「おい、ここにおるんか戦動？」

な！？なんであいつの声が！？

正「お、二階におつたんか。てか戦動の家つて結構大きいのう。わしの家とは大違いや。」

陸「なんであなたがいるんですか、拳武さん！？」

正「なんでつて、さっきの事謝ろうと思つたから家探してここまで来たんや。」

馬鹿な、こいつはさっき俺が撒いたはずなのに・・・地力でここまで来たのか？しかもそんな事で？

正「まあ、とりあえず謝つとく。すまん。」

こいつ・・・馬鹿すぎるだろ・・・

進「ちょっと正、こんな夜中じゃかえつて迷惑だつたんじゃないの？」

てこいつもいるし!!

正「まあええやんけ。お陰で戦動の家もわかったしのう。」

な、なんでこいつら・・・こんな事するんだ・・・意味がわからん・・・なんでこんな事を・・・

進「そんじゃ、もう帰ろつか。多分戦動君つっとおしいと思ってるよ。正の事。」

正「やかましい!!これがわしの性分なんじゃ!!」

進「それじゃ、おやすみ。」

陸「・・・待ってくれ。」

正「へ?なんでや?」

陸「・・・お前らには心底呆れたな・・・場所もわからないのにわざわざここまで来て・・・用はただそれだけ・・・どうしてお前らは、そんな事が出来るんだ?どうしてそこまでするんだ!」

進「簡単だよ。だって僕達友達でしょ?」

陸「友達・・・」

正「そうや、お前さんがどう思ってるかしらへんけど、わしらもう友達やろ?友達の為なら、これぐらい当然やで。」

・・・そうか、俺がこいつらの事をふと思ったのかこういう事が・・・俺とこいつらはもう・・・友達だったんだ・・・それだったら、俺も応えるべきだな。

陸「じゃあお前ら、今から俺の家が上がっていけよ。」

正「へ？ええんか？こんな夜中に？」

陸「お前らがいいならそれでもいい。」

進「本当！？じゃあ上がっていきつよ正！！」

正「そうやの。上がらしてもらつで戦動。」

陸「戦動じゃなくて、陸でいい。」

正「そか、じゃあ陸もわしの事、正でええで。」

進「僕は進だよ！！」

陸「わかったわかった、これからよろしくな、正に進。」

それからの俺達は色々であった。

正と進は学力の方も馬鹿だったので、俺がよく勉強を教えてやつた。お陰で少しはマシになった。

ある日、俺の事を嫌う奴に集団でぼこにされそうになったが、正と一緒にそいつらを倒した。それ以来正に時たま軽い喧嘩を挑ま

れる事があつたが、全部俺が返り討ちにした。進はちよくちよく仲裁に入った。

中学卒業後、俺は正や進と同じ高校に進学する事を決めた。母さんは反対したけど、父さんがいたので事なきを得た。そして今の俺はと言うと・・・

う「・・・陸、陸ってば。起きなさいよもう。」

陸「ん？どうした？」

う「もう陸ってば、全然起きないんだから。他のみんなはとっくに起きてるわよ。」

陸「ああ・・・そうか、俺は今幻想郷にいたんだな。いや、俺達か。」

う「何言ってるのよ陸？寝ぼけてないで布団しまいなさいよ。」

陸「ああ、わかってる。」

う「そう言えば、正だけ宿にいないんだけど、心当たりある？」

陸「正なら、多分早朝のランニングをしてるだろうな。」

う「そう。変なのに絡まれてなかったらいいんだけど・・・」

陸「それもそうだな。それじゃ、今日は永琳に頼みに行く日だったな。」

う「ええ。師匠の事だから簡単には行かないかもしれないけどね・・・

・
」

陸「そこは任せろ。俺なら大丈夫だ。」

う「頼りにしてるわよ。」

三人一緒に幻想入り 第15章 鬼と人に続く

（後書き）

お、感想やで、いや、後書きだ、いや、自己満足だね。

は、恥ずかしい・・・これはちょっとはずいですね・・・（――）
#

昔なんとなく書いていた物を引っ張り出ただけあって、すんごい若いーって感じがしますよ本当。

彼ら三人って、昔こうだったんだ的なノリですね本当。

今回は何となく陸視点でやらしてみました。その方が楽だったの
で（――）

陸のお父さんはフル英語ですけど、間違ってる可能性もあるのでこ
注意を。作者の英語の評定3ぐらいしかないので・・・

ノリがあまりにも中2ですけど、まあ勘弁してくださいな。

スペシャルサンクス

戦動 陸 様

拳武 正 様

鳥間 進 様

クラスの先生

モブ男子生徒

モブ女子生徒1

モブ女子生徒 2

モブ女子生徒 3

モブ女子生徒 4

陸母

陸父

では、こんな駄文の塊をお読みいただき、真にありがとうございました

（#^|^#）

b y 澄田 康美

PS、個人的にはお気に入りですので、気に入ってくださいたらこれ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161o/>

三人一緒に幻想入り外伝 三人のなれそめ

2010年10月11日14時20分発行